

ときは負擔金を減免することを得しへき旨を新に挿入せむ

ことを申出た由であるが、至極尤のことと思ふ。

樂屋から見たる五十二議會史

覆 面 生

▽超國民的の議會政治であるとか、醜惡なる政黨であるとか、或は妥協苟合の外に策のない政治屋の集團であるとかと言つて、議會政治を否認して見たり、或は既成政黨の打破を痛烈に攻撃して見たり、或は職業政治家の跋扈を憤慨して見たりした所で、政黨があつて議會政治をやり、堂々と十七億三千萬圓の大豫算を何等の波瀾なく議決してゐるといふことの事實の存在の前には、悲憤慷慨は何の價値もない、娼妓の起請文同様唐人の寢言に過ぎない。

議會政治の破壊なり否認なり或は建設改造を絶叫してゐる人が、終始一貫其の主義を押し通すのかと思へば、何時の間にか豹變して、筆者をして啞然たらしむることがある

種々の階級の人達の叫び、種々の畫策、種々の論難批評、總てが生活の糧である、其の手段に過ぎないもの許りである、噫思へば道は遠し南柯一夢の妄想に過ぎない。

▽今議會をして波瀾重疊の場面から波紋一つ起らない平靜なる場面に變轉さしたる三黨首の妥協劇に就ては、吾人共に其の真相を掴みたいであらう、如何に新聞紙上にてドラマチックに會見記を描いて見ても一片の空想に終るのみである、其の内容を如實に且つ赤裸々に描いたる事實は一つもないさうである、夫にも拘らず黨首より戒勸を受けたる幹部や陣笠共が、寄れば觸れば各自が勝手なる錯誤の觀念の上に立つて竊かに快心の笑を洩らして居るではないか、

試みに各政黨を一巡して見る、政友會は曰はく

「ちやんと約束済みだよ、政變は四月さ、我黨の天下だからね、何、其塵ことがないつてね……馬鹿を言へたまへ憲政常道から言つたつて第二黨の我黨に政權が落下するのが當然過ぎるほどの事實だよ、西園寺さんといふ人は波瀾を好まないからね……」

政友本黨の曰はく

「冗談を言つちやいけない、満身瘡痍の田中政友會總裁に政權を行つてたまるか、黨員の数は少くとも政權の鍵を握る者は誰だと思ふ、あとは言はずもがなだ……」

と呵々大笑して居る。

憲政會は曰く

「其塵に簡単に政權を譲つてたまるかい、公明なる政治を期する上に於てやつたことで、深甚なる考慮に他意がある筈はないよ……」

冒頭から否決されて了つた。

何と深甚なる考慮の文字が政界に波紋を描くなどの偉大な

ると深刻さを思へ。

結果、政友會でも政友本黨でも政權柄の役割が出来て、陣笠共も又獵官運動猛烈なりと聞くに至つては吾又何を言葉はんやだ、第二の松島事件にならぬよう氣をつけ召され、深甚なる考慮といふ文字が妥協劇に使用されたので、戒筋を受けたる陣笠議員共、委員會と言はず本會議と言はず此の文字を使用することが如何にも探つたいと言つてゐる殊に政府委員は議員の質問のある場合一層其の感を深くするので困ると言つてゐる、夫れで種々と研究して

「篤と御詮議を致しまして何れ……云々」

といふやつが流行するようになった、政友會の山崎達之助氏などは

「實に名文句だよ」

と感嘆久しくしてゐる。時勢の進達といふやつは種々の新熟語を生みます。

マ今議會で頻りに春風駘蕩の熟語が濫用される、委員會などで如何に議員の質疑が猛烈を極めても、猛襲を受ける政

府委員が妙な顔をしてゐても、場面が緊張すればするほど

誰か茶目な議員が此の熟語を使用すれば、忽ち其の委員會

は直下一轉して破顔一笑和氣霽々たる光景を呈する、野黨

も與黨も喧嘩せずに仲よくやらうといふ腹があるからであ

る、夫なれば此の熟語は誰が使用の皮切りであるか。

十七億三千万圓の形大なる豫算審議の第三日目の委員會

に於て幅編安といふ渾名の持主である政友會の吉植庄一郎

氏が質問に名を藉りて片岡大藏大臣に對する質疑中、突然

使用されたので滿場哄笑苦笑の渦巻を捲き起した、流石の

若槻總理もニヤリと苦笑を洩らした、熟語としては極めて

古いのであるが使用途が斬新であつた。

▼次に政府の首班たる若槻首相を始めとして、各閣僚並に

大小の政府委員に至るまで悉くが使用する言葉に

『至極御同感であります……』

云々の濫發である、或る皮肉屋が、

『此の内閣は御同感内閣だ、何を質問しても御同感である
と言はれるので張合ひのないつて、こんなことは實際珍ら

しい現象だよ』

と脾肉の嘆に堪へぬが如き様であつた。

政府委員にしたつて言ひたいことは言へない、どんなに阿

呆らしい議員の質問でも至極御同感だと言はなければなら

ぬ政府委員も又つらいかなである、筆者も御同感である。

▼十六年度以降一千万圓を考慮するといふ義務教育費國庫

負擔増額費は、昨年の議會で税制整理の交換條件として政

府から政友本黨へ與へたる言質であつた、其の言質を握つ

た當時の委員であり且つ本黨の税方面の一枚看板たる小川

郷太郎博士は豫算總會の席上にて、

『政府は一千万圓を何故考慮しなかつた……』

かと種々と攻道具を揃へて喰つて掛つても肝心の片岡藏

相ケロリとしてゐるので業を煮やした小川博士は

『政府怪しからんよ、ねエ君さうぢやないか一千万圓を考

慮するといふことは國民に約束済みぢやないか、夫を無視

して解散豫算を樹てて半額の五百萬圓で國民の信望を繋か
うとする政府の方針はどう考いても卑怯だ、豫算がないな

らばよいさ。然し剩餘金がいくらでもあるぢやないか、何

と考へても公約を無視する政府は怪しからん」

と廊下にて頻りに餘憤を洩らしてゐる所へ、或る政府委

員が通り掛つた、直ぐ見つけた小川博士、

「第一君等怪しからんよ、嘘をつくから……」

と劍幕が激しいので、

「妥協々々……」

と逃けて了ふ。其の小川博士更に聲をひそめて

「僕が一生懸命叫んでもどうも黨が熱心でないので……」

と首をかしける。

其の翌日政府筋から

「小川が一人で頑張つて見ても、肝心の床次總裁が其塵こ

とがあつたか知らんと言つてゐるさうぢやないか」

の宣傳風の如く四散する。

竟に小川博士の奮闘も空しく半額の五百萬圓で梟がつい

たとき、

「おい小川君、あとの五百萬圓の考慮はどうした」

と茶目連頻りに揶揄する小川博士こそ浮ばれない。

▽同じ教育問題で奮闘した政友會の山崎達之助氏が、やはり豫算總會の席上、岡田文相と散々腹遣り合つて、青年訓練所と兵役法との關係について

「本席には陸相も居られないやうだから強いて御答辯を望みません」

と陸相の病缺を百も承知、又、陸軍少將であり陸軍の參與官である溝口伯が政府委員席にテカテカした頭を光らしてゐることも百も承知の助で斯く前提して質疑を二問した所、背の高い溝口伯、乃公一番陸相の代りと許りに、ツカツカと大臣席のテーブルの所に立つて答辯したまでではよいが、答辯の筋途がシドロモドロであるので果然、委員會の光景は満場をして冷汗をかかした。

口悪い議員が、

「どうしてもあの答辯は陸軍少將の答辯ぢやないね、山崎とは段違ひだね、さぞサーベル連日惜しかつたらう」

控室へ引き揚げた山崎氏

「答辯しなくてもよいかから意見にして聞きおく、といふことに溝口君と諒解をしてあるのに答辯をするから駄目だ」

其の眞偽の何れかは知らないが、溝口君は一遍で落第と決まつた、恐らくは衆議院では答辯の皮切りであらう、また今後とても皮切り終ひでもあらう。

▽よく議會では政府を困らしてやらうと思ふと意地の悪い議員連が質問苛めをやる、對手を怒らしてゐる中にヒョイと飛んでもないことが洩らされて大騒ぎをすることがある。對手の政府委員が新しいと思ふと一層苛める傾向がある。昨年の議會では、清野復興局長官に對して復興の條に對する質問苛めをした憲政會の高木益太郎氏などは特筆大書すべき事柄である、誰かしらんが、

「清野の死去したのは高木君が苛め殺したのだ」

と御弊を擔いでゐる一人もあるほどである。

老巧なる所では小野義一の艦制豫算で財部海相を、兵役と在營で岡田文相を苛めた山崎達之助などは對手が偉物であるだけ、役者も演出には張があつた、本年の議會では政

友會の西方利馬といふ一年生の代議士が震災手形の整理委員會で、片岡藏相を對手取つて連日質問苛めをして、敵味方の委員連をして、ヤンヤンと言はせ片岡藏相をして避易せしめ、竟に金額と銀行との件數を白狀せしめた。

次に本會議の席上に私有鐵道買收法律案が提案されたる時、井上鐵相の提案理由の説明の終了するのを待ち構へて、

「議長々々……………」

と連呼して演壇に飛び上つたのは前久松署の警部であつた憲政會の中野蠻寅こそ寅吉氏であつた。

買收鐵道法案中越後鐵道の買收不當なるを交通政策から説述して、

「俺は草鞋をはいて越後海岸から山間まで巡つて來た體験から……………」

を眞向に振りかざして滔々三十分以上も説き去り説き來つて經綸を吐いた。

「こんな鐵道は買收に反對であります」

を叫ばしめた、夫に對して井上鐵相は

『只今中野君の交通政策の大經綸を承はりますが、これは要するに……』

とロイド眼鏡越しに中野君の顔を輕視したものだ、中野氏は眞赤になつて、

『俺は憲政會の陣笠と言へども、俺は最後の一人となつても反對をする、外の諸君も必ず反對をされるであらう、人の説を冷やかすとは怪しからん、俺は改めて反對を豫告する』

嗚呼り立てるので、政本兩黨では雨の如く拍手をする、憲政會の總務連妙な顔つき、井上鐵相の隣席に居た安達臨時内相はクスリと笑ふ、實に珍妙な光景である、其の御蔭で未だにおき私設鐵道買收の委員會はゴタゴタしてゐる越後鐵道の買收は行惱みになるらしい傾向である、一陣笠の反對また偉大なるかなである。

▽一體今年の議會は陣笠横行之議會である、例年ならば重要な法律案を審議される委員會は勿論本會議でも、政府

の提案、議員の提案を問はず大抵二三人は總務級の委員がゐるて巧妙に委員會の空氣を操縦したものだ、所が本年は深甚なる考慮の結果、總委員は殆んど陣笠にて埋め合されて居る、従つて陣笠共が、

『安達君とか……』

『片岡君とか……』

甚しいのになると若槻首相を捉へて、

『若槻君が……云々』

とやる、偉いこと偉いこと、思はずひやりとする。

夫でも仕方がないものだからいとも懇切なる答辯をやる何と言つても議員なるかなであらう。

其の陣笠共の間で閣僚の答辯中尤も評判のよいのは安達臨時内相である。

必ずグツと碎けた態度で

『議論はさておいて、個人的に言はずれば、私はこう思ふまア一つ聞いて下さい……』

と冒頭して醇々として説述するので

『至極御尤な御意見でありまして……』

と陣等議員の方から、政府に言ふ様な言葉遣ひをして感謝の辭句の外に二の句を繼がせない、ほんとに海千山千とは安達臨時内相のことである、又妙と言ふべし。

更に金錢授受に關する政黨の改正案に對する政友會の喧嘩物兵衛こと原惣兵衛氏と提案者の尾崎行雄氏との論争に於ては、原氏

『尾崎君が……』

を連呼して喰つて掛つても尾崎氏より

『原君に論議することの光榮を得まして……』

とあつさり片付けられては流石の野次馬も言句に詰まつて眼を白黒するより外はない、これらは陣笠立役者との力の相違である、これは赤裸々であるからである、政府委員の如く遠慮して

『至極御同感なり……』

と謙讓の美德を發揮しないからである。

本會議の演壇に飛び出す議員を見給へ、悉く陣笠である

神崎勳なんて代議士は居たかと存在を疑ふ位である、先の憲政會の井上剛一の様な癖を有してゐる人である。

陣笠議員の横行は來る昭和三年に行はれる議員改選の普通選舉に對する地盤擁護運動である、一言でも喋々すれば速記録に記載される、夫を選舉區に送れば存在の價値を認められる、夫が土地の繁昌策の建議案であれば一層有効である、今議會はまた建議案の大洪水を來すであらう。

▽今議會を通じて美德とすべきは尾崎行雄氏と原惣兵衛氏との法理的根據についての論争の際、耳の遠い尾崎氏がよつく質問の意味が分らないので、尾崎氏の法相時代秘書官あつた畔田明氏が尾崎氏の隣席に居て、赤鉛筆を以つて質問の要領を書き誌し、尙ほ同志の湯淺凡平氏を依頼したことである、これは師弟の美德である。

次に憲政會の作間耕逸氏が復興計畫について演説をしてゐるときに、前復興局の清野長官を苛め殺したと言はれる高木益太郎氏が我意を得たりと獨りて悦に入り、頻りに拍手をしてゐる光景は如何に作間氏が高木氏と師弟の關係が

あると言ひ、事柄は政府の尤も反對すべきことであるのだ。

「高木奴——またやり居るわい」

の悪印象を與へる、これは悪い方の師弟の美德發揮である。

次に政友本黨の美男子清水長郷氏の提案で

「婦人席は東西に區分して呉れ、俺の黨からは見えない」

の苦情が早速、中村書記官長

「夫は御尤も、東側に許りあるのは公平を缺くから西側にも分けませう」

聞き届けられ政友本黨の若い面々

「どうだ、よく見えるだらう、春景色だなア」

と負惜しみを言ひながら議席から西側の汚い女學生の傍に陣取る事を習慣になつてゐるのを少しも御存じがない、夫でも政友本黨の若い面々

「清水出かした」

と褒めちぎり、ほめられた清水氏は今度は「有難う、感謝す」

と中村書記官長を禮讃をする。

何と多愛のない議會であらうか。

折角のことだ此上は守衛に頼んで西側にも美人を傍聴せしむることにしたならば如何、これは謙讓美德ではあるまいか、敢えて提言する。

▽憲政會の陣笠工藤鐵男氏によつて散々腹コキ下ろされて提案政黨自體の中から裏切り者を續出せしめた北海道農地處理法案……

これは本會議を通じての露骨なる利權案である。

簡單に言へば、ロハで貰つた邊陲なる土地を高値で政府へ賣りつけようと言ふのである、三十年以前に貰つた土地が多い、夫を六千萬圓といふ高價で賣りつけようといふボロい儲けの出来る法律案である。筆者は詳細なる裏面史は知悉してゐるが言ふべきではない。

只だ此の法律案の作者は研究會の馬場であるといふこと

計畫の立役者が田中清助であるといふことを書けば頭腦明透な人々は

「アハン成程な……」

と一目諒解出来るほど名聲噴々たる問題である。これほどに有名なる問題の提案をしたる政友本黨は總裁始め幹部は勿論陣笠に至るまで知らなかつた、名前は知つてゐたが内容の重大なることを知らなかつたと言ふので、可決か否決かのどたん場になつて、提案者の丸山浪彌が聲を噓らして喋々してゐるとき、自黨の少壯連

「何時代議士會に計つたのだ、俺達は知らんぞ、あれほど重大なるものを俺達が知らんとは怪しからん、どうだ有志代議士會を開いて賛否を決しようではないか」

と山猫の渾名ある森田正義氏を始めとして三十餘人が院内控室にてザツメキ且つイキリ立つてゐるので、悠々として碁や將棋をやつてゐるた櫻内、松浦の兩幹部

「困るなア……」

と交互に困却の眼を見合せて溜息を吐く許り、鎮撫しよ

うともしなが。

「丸山君が代議士會は爾後承諾にして呉れといふので吾々も賛成したのだよ」

と櫻内氏が本音を吐く

夫から怪しからぬとか幹部は横暴だとか言つてゴタゴタしてゐる中に

「政友本黨の議席を見よ、誰も居ないぢやないか本黨に反對者が居るとよ、如何だ今の中に不意打を喰はして否決して了ふか……」

と憲政會が密議を凝らすかと思へば

御家の一大事と許り本黨の牧山耕藏氏は松田源治氏と密議をして政友會席に飛び込む

「やれやれ一大事と……」

これも泡喰つて食堂でよい氣持になつて氣焰を揚げてゐる自黨の代議士連の狩り集めに大騒ぎ

さうしてゐる中に本黨の少壯連は缺席同盟を作つてサツサツと歸邸して了ふので

丸山氏如何に口惜しがつても詮方ないので、此の急場を救ふために本黨の寺田市正老が提案の審議を延期してつ

た、僅少三十分許りの政府並に與黨野黨の議場の駈引の鮮かさを樂屋より見てゐる愉快さはまた格別である、此の芝居も笛を吹いたものも、踊つたものも、また破壊に導いたものも口火を切つたものも漸く終末を完ふせしめて、醜體を赤裸々に演出させなかつたものも、悉く陣笠連の力であらまた陣笠偉なる哉。

▽其の陣笠の偉大なる團體としては憲政會には更新會あり政友會には純眞代議士會あり、穩健着實總裁一任主義の本黨に於ても又少壯代議士の一派がある、此の集合團體は過般の總選舉に於て始めて當選したる政黨の第一年生である昔は陣笠と言へば政黨の首領並に幹部の意の儘にて命唯だ之を奉ずるのみである、然るに今の陣笠は反對に幹部を壓倒するの勢力を示し、若槻總裁をして「今の若い連中には私の言ふことに不満の者が居て仲々言ふことをきかなくて困る……………」

の嘆聲を洩らしむる程に格段の相違がある、これは時代の進運と陣笠連の力である。

大抵この一年生は各政黨共に三十人位居る。

政友會では有馬頼寧、小野義一、山崎達之助、西方利馬若宮貞夫、山内確三郎、なんていふ若手が錚々たるもので篠原、井上、今井なんて言ふ連中が専ら中心となつて幹部公選とか公平なる輿論とか言つて常に騒動を捲き起す、大抵集合地は赤坂邊である。

憲政會では武富濟、工藤鐵男、戸澤民十郎、井本常作、戸田由美、田中養達、加藤鯛一、山樺儀重、なんて言ふ連中が騒動屋の中心である、いつも颯風捲き起してゐる、小川平吉問責案を提案して各政黨の幹部共をして苦惱せしめてゐるのも同じ仲間である。

少壯代議士の中でも過激なものと溫和なのとがあるが、前記の連中は尤も過激黨である。

「幹部何物ぞ……………」

の抱負の下に畫策をめぐらす、いくら幹部が慰撫をやつ

ても

『純新なる考の下に公明なる政治を期す所以だ』

と二べない返事をしてゐるので、今度の小川平吉問責案も此の手段でやつてゐる。

さうして仲々宣傳が上手である。

『本會議に出し放しておくことが恰も未決に收監されてゐると同様、萬一提案を引込ますにしても一般世間的には効果大なるものだ、新聞では大きく書いて貰へるし』

一とは提案者の武富濟氏の大言壯語振りである、實際日一と引き延ばしの運命に遭つてゐる小川氏こそはよい面の皮である、何のことはない組上の魚同様焦慮せずには居れない、憲政會の中原幹事長の如きは

『あれで効果が奏したのだから堪忍してやればよい』

小川老に同情をする。

『餘り大きなことを言ふから意地になつてやるんだ』

と少壯連がやり返へす始末である。

今議會始めて憲政會の幹部も苦心を拂つたであらう、或

る中陣笠は

『今の幹部もだらしなないよ、あんな一年生共がアがア言つたら主謀者の二三人を頭からカンと遣り込めばよいのさそうすれば直ぐ無事に收まるんだよ、夫と言ふのも幹部共は酒を吞ますことを知らんから度し難い幹部共さ』

皮肉を言ふ者もある。

何しろ更新會といふものは事の善惡を問はず有名になつて來た、其の清新なる意氣で政黨の淨化をたのみたい。

政友本黨に至つては中山、柏田、清水、兼田、宮島、前田、寺田、藏園、平田、森田といふ連中が活躍してゐるが穩健黨の名に背かず何れも鬪志に乏しい、何事も總裁一任である、北海道農地處理法案の場合の如く缺席同盟をしてまで投票の棄權を企圖するが如きことは政友本黨としては恐らく古今未曾有の前例なき暴例であらう、幹部の驚愕も御察し申す。

夫程に何れの政黨の陣笠連も昔と違つた様に純真でありまた夫々の特長を發揮される人達である、幹部は昔の號令

一 下右へでも左へでも自由に曲ることの出来る陣笠なりと
甘い夢を見てゐると、幹部其者が陣笠においてきほりを喰
ふ、御要心召され。

△尤も特長發揮の更新會の陣笠中にも、これはこれとは思
ふ様な過激派分子が存在してゐる、過激派と言つたとてロ
ンヤ式の左傾分子ではないから御安心下さい。昨年滋賀縣
の補缺選舉で出て來た田中養達氏のことである。

長身瘠軀山羊髭を生やして、如何考へても労働者タイプ
の男である。

此の男が今度の小川平吉問責案提案者中の最硬派に屬し
て居る、幹部何者ぞの意氣天を衝くの勢である、従つて服
装にしても田淵仙人と同様破格の服裝をして居る、カラー
代りをするジャケットを下着にして其處の下から黒いネクタ
イを押し通し、毛糸のチョッキを着て平然と構へて居る、
誰でもその破天荒の珍服裝を

『おい、田中御前の服裝は何のことはない、線路工夫の様
な格好だよ、カラーを掛ける』

と擲論傍々注意を喚起すると

『御忠告は有難い、然しだ、一體カラーは何のために掛け
るといふ理屈が何處にある、別に法理的根據はないぢやな
いか、女の半襟と同様の品物ぢやないか、そして見れば我
輩がカラーを掛けなくてシャツ其儘なカラーをしてゐるたか
らとて違法ではあるまい』

と喰つて掛る。

『夫でもその格好で議場に入る勇氣はあるか』

『うん、大ありだよ、若し議長が何か注意したらば言つて
やるよ、時代は第一何時までも形式論に捉はれてゐるとき
ぢやないよ、普通選舉になつて當選したる議員が労働者で
あつて見給へ、彼等は、俺達の服裝はハンテンだからとて
言つてハンテンを着て議會に來たときに如何處置を採らん
だい、又、坊主が當選したとき赤い衣を着用して來たとき
にどう制限をするんだ、彼等は自己の職業の信條によつて
服裝を整へて來るんだ、夫をどうして限定しようと言ふん
だ服裝よりも精神ぢやないか、えい諸君どう考いる』

と滔々と時代精神の御講義が始まる

『夫りや滋賀縣だけで流行るよ』

と誰かの半疊で好漢閉口たれる。

夫と同様の問題が田淵仙人の縮羽織着用論である、これは議長に發見されて御眼玉を頂戴したが、前者の場合も嚴肅に考へれば形式には外れて居るに違ひない、免角服装破りの好一對である。

『俺は貧乏だから紋付を有してゐない、何でもよいではないか、そんな窮屈なことはあらへん』

は田淵式の論法で簡單である。

△其の田淵君が二十五歳以下の禁酒法案で

『酒は呑むべし、人世の憂さ晴し』

といふ信條の下に禁酒を反對してゐるが、其の反對の理由の根據となるべき材料は何處から仕入れたか、禁酒法案が本議場に提案されるといふ一週日前二月十二日に内務省に來て、衛生警保の兩局を尋ねて、酒害に關する統計から引抜き汚い手帖に移し取つたものである、即ち一夜漬の

材料である。

『私の兄貴は酒屋だが、禁酒に反對をしたら酒屋から運動費でも貰つたと思はれるかしらん、ネエ君……』

彼の良心の發動を考察して呉れ、如何に純眞であるか其の男が委員會で述べる反對の議論を玩味すると興味津津たるものがあるではないか。

夫と同様に議員の種明しを二つ餘りして見よう。數字的頭腦を以つて財政學に通曉してゐると敵も味方もまた我自らも許してゐる人に、政友會の大口喜六、本黨の小川郷太郎の兩氏が居る。

兩人が議場ではたまたま委員會で

『議長、議長……』

を連呼して政府に向つて質問の矢を放つと、片岡藏相も急に緊張する位に數字の權威者である、その權威者の材料の仕入れ場所はと言へば、大きな聲をすると怒られるからこつそりと言ふが

『内務省の田中財務課長閣下である』

こんなことを書くところぴつとく怒られるが、兩氏が財政に關する數字を調査したときは、手紙でまた御當人自身で出掛けて來て種々と田中君から教示を受ける、此の兩氏と田中君とはとても仲がよい、昨年、の税整から田中君の眞價を明確に知つた兩氏は田中君をまたとない數字の財政學の權威者として尊敬を拂つてゐるからである、夫を知らば直ちに諒解がつくであらう、兩氏の頭腦の明透さを……。

もう一つ悪い意味の種明しをしよう。

東京市會にて瓦斯増資問題を中心にして可否の論争が渦を捲いてゐるときに、本議會で政友會の安藤止純氏が瓦斯問題に關して緊急質問をしたが、いとも莊重にかつ嚴肅にね、所が此の質問の要旨こそは前日控室にて専門家から聞いた許りの一夜漬の知識であつた、どうだ開いた口が塞がるまい。呵々……

△衆議院の委員會で禁酒法案が樂隊入りで騒ぎをしてゐる時に下院の吞兵同志が議院食堂にまた燕樂軒に虹の様なメートルを揚げて居る、大抵の者は吞む量の程度問題である

毎年飲んで管を捲く板野友造氏の如きは、すっかり迷論を封じ込まれたので食堂では意氣軒昂である、誰彼の區別なく當りつける

「政友會の奴等駄目だ、どいつもこいつも勇氣のある奴は居ない、ハハ……」

と來る、上機嫌である

「おい、鳩山拂つておけ……」

恰も子供扱ひである、夫でも怒られない可愛い男だ、尙ほ新止俱樂部の畔田明氏を捉へて

「お前は銀流しだね、え、おい」

と來ては手のつけようがない、畔田氏苦笑沈黙……

△婦人參政權の常連婦人がその物凄い御面相を受付の控室に頑張らして居るので、毎年呼出しを喰つて避易してゐる若い議員連

「桑原……桑原……」

と手を合すほどに彼女等を避ける。

「何々さんに御會ひしたい」

の名刺を給仕から通ぜられると

『おい居ないと言へ』

と控室で筑碁やハポ將棋に熱中してゐる。

こんな筈ではなかつたがと不審に思つても詮方がないこれは彼女等のどこかに缺點があるからだ、餘り執拗なのか夫とも中性的美人であるためか、筆者も其の理由に苦しむ一人である。

△例年議會が開會されると政府には必ず上院下院を通じての情報係りを遣へる、否平生からあるのだがきはだつてよく目につく、本年は上院は勅選の太田警視總監、川崎内務次官の兩氏に大目付役は塚本書記官長である、其の上を安達遞相、若槻首相といふ段階を設けて居る、下院の方は松村警保局長が専ら努めて居る、其の下役を勤むるのは警保の宮田屬、馬場屬、警視廳の若林警部以下數名の高等視察係りといふ網の張り方である、そして四方八方から情報を集める、頻々として來る、正確に來ればよいが奇襲的にやられる場合は時々間違がある、其際は奔命汗だくで

ある。

△平靜其物の様な議會で尤も衆目をひいて居る法案に宗教法案といふどえらい法律案がある。

これは坊主や神主やキリストそれに騒々しい救世車から天理教まで包含してゐる宗教法であるので、提案前から反對の陳情攻めで外の喧しいのかぶれたためか、内にあつても議員さん達は仲々喧しい、殊に上院の老議員さん達は記憶がよいので、第一回の提案當時の沿革やら模様を知つて御座つて政府に猛襲を加へるので岡田文相大弱りの體である、また矢面に立たせられる下村宗教局長の如きは

『何の因果かね、こう苛めぬかれるのは、これも佛様の罰か、神罰か、何にしても浮ばれないよ』

と助船を呼んで居る、其の中に救世の船が來るから安心したまへ。

夫ではこれほど喧しい宗教法案の歴史的沿革は何時頃にあつたのか、簡單に述べて大方の知識の補助教育をしておかう。

△時は明治卅一年から卅二年に至る十四議會である。政府は大隈内閣の下にあつた尾崎文相が、共和演説をやつたところが内閣に累をなして板垣内相が大隈首相と意見衝突して

内閣の瓦解を見たる其の後を受けて明治卅一年十一月山縣有朋氏が首班なとつて、第二次山縣内閣を作つたときから禍を發してゐる、其の時の閣僚の顔觸れば

山縣首相、青木外相、西郷内相、松方藏相、桂陸相、山本海相、清浦法相、樺山文相、曾根農相、芳川遞相

といふどえらい連中許りである、後年どれもこれも首相をした人許りである、殆んどこんな内閣は地震内閣以前にも以後にもあるまい。

西郷内相のもとに書記官長が今の滿鐵社長たる安廣伴一郎氏であり、法制局長官には樞密院書記官長から轉任して

來た平田東助氏であり、内務次官にば小松原英太郎氏であり社務局長（後に神社と區分して文部省に移管して宗教局になる）は斯波淳六郎氏であり、岡田文相や下村宗教局長を向ふにまわして花井卓藏博士と共に論難し努めて居る水野

鍊太郎博士は當時高等官四等で内務大臣祕書官兼參事官の官職であつた。

上院の議長は近衛公であり、其の時の委員長は黒田長成侯であつた。

委員會に移されて甲乙の論難喧しく容易に可否が決まらない、夫れで事重大と見たので西郷内相を引張り出した。

『この案は極めて重大なる案で御すから何卒審重審議可決あらんことを希望します』

と内相西郷從道侯の鶴の一聲でバタバタと議論が纏つて本會議に附議したところ賛百票否百二十票即ち二十票の差異で惜敗したといふ因縁つきの法案である、夫れで祕書官として當時の模様を知悉してゐる水野博士は

『俺は何んでも知つてゐるぞ』

と攻めたてるので政府當局者大弱りの體である、下村宗教局長の如きは

『何しろ年齢の差が大變だからね、三十一年といふと君、俺などは中學校に入學したほやほやの生徒さんだよ、苟め

られても無理はないよ』

と諦めて居る、夫にしても當時の社務局長たる斯波淳六郎氏は生存して居られるようだが、今昔の感はなきか、水野會長の御奮闘を祈り奉る。

△五十二議會を通じて政界に尤も大なる衝動を與へたのは何と言つても憲本提携といふ大芝居である。

『昭和新政に當りて……』

の三黨首會合も妥協劇も何處へかすつ飛んでしまつた、世間も啞然として了つたが、三黨首會合を金科玉條の様に堅く守つて、政權病を満足せしむる唯一の武器として喜んで居た政友會をして、藤澤商相ではないが

『急轉直下とは富士山からゴロゴロと石を轉すこと』

ほどに驚愕して、足が地につかない有様である。

安達臨時内相が西園寺和尚へ參詣の途次

『議會が終了したならば諸君をして啞ツと言はしめる様な面白いことが起るよ……』

と新聞記者に語つた車中談が、適々政友會の代議士會に

て問題になつたのは憲本提携の芝居を發表される一週間以前であつた、其時政友會の某幹部が

『あれは虚構の事實である、新聞記者の捏造であると安達君が陳述をしてゐたから堪忍してやりたまへ』

と宥められて陣笠も無事通過……

夫でも何となく危険があるといふ雰圍氣に侵はれて

『憲本提携の相談を祕密裡にしてゐるといふ噂だが、幹部は御承知か……』

と機會ある毎に陣笠連から幹部に向つて警告を發すると幹部はきまりきつたといふ顔付きで

『御注意あるまでもなく手落のない様に善處してゐる』

と幹部の威光で陣笠連何を言ふかと一蹴して了つた、夫程に政友會は憲本提携なんて言ふことは夢想だにもしなかつた、夫がボツボツと怪聞を耳にし出した、新聞紙上に一齊に發表される二日程以前に中央新聞の某記者が社長でもあり又政友會の總務でもある山口恒太郎氏に

『憲本提携の密約を某所でしてゐるらしいから、新聞で書

かうと思ふが如何……』

と御伺ひを立てる。

『御用新聞が其麼ことをかいては不可、また第一其麼ことがある筈がないよ』

との御宣託

『フン、御目出度いなア、夢を見てゐるんだから始末におへない』

某記者は收まらない腹の蟲を無理に收めて

『左様ですか……』

と引下りはしたものの、何となく不安に思はれて

『社長には氣の毒だが不意打を喰はしてやれ』

と許り翌廿六日の（二月）の朝刊で素破抜きをやつて漸く腹の蟲を収めた、夫でも世間は餘り注目をしなかつた、政友會の御用新聞が何を言つてゐる位に思つて、政友會は勿論信じはしない、第一中央新聞を眞面目に讀んでゐる政友會の代議士などはゐないからだ、夫が廿七日の朝刊紙上に市内の悉くの新聞が一頁を割愛して、デカデカと初號活

字で憲本提携をかき聯ねた時には政友會の幹部も陣笠も愕然として色をなしたとの噂である。

愁報悲報が四方に傳はり吾人は耳を掩ふても掩ひ切れな
い程の大騒ぎであつた。

『中橋徳五郎氏が友達の所を自動車で駆け廻り、憲本提携はほんとかほんとかと念を押して歩いた』

とか或は

『幹部の連中は右往左往して研究会へ聞き訊しに行つた』
とか

『渡邊千冬氏が後藤新平氏の所へ行つて、本黨の奴等怪しからん、此の俺に一言の挨拶なしにやつたから癢に觸はるから熱海へ雲隠れをやるんだ』

御叮嚀にも言譯をしたとか種々のことが吾人の耳を騒がす、出来てしまつてからいくら騒いで見ても何にならう。

悉くが盲動であり世迷言である、此の結果の代議士會の緊張したることを想像して、給へ、一言居士連の林立である七回の起請文を平然とかいたり破つたりした本黨の床次總

裁が偉いか、まんまと一杯喰はされた政友會が醜體であるか永久に時の裁きを待つより外はない。

△憲本提携と聞いてほんとに文字通り欣喜雀躍したのは政友本黨である、アノ陰氣なジミジミした階下の控室が急に一陽來復の明るさである、小橋一太氏が研究会に渡りをつけるために、貴族院への往復の激しくなればまた、小橋氏の秘書役たる大麻君の白足袋が眞黒になるほど御注進役に忙殺される、控室では我黨内閣の顔觸を番附面に表はして得々然たるものもある。

床次總裁の總理の下に川原茂輔老、元田肇老、田中隆三小橋一太、松田源治、本多貞次郎、牧山耕藏、湯池孝平、中村啓次郎、川口彦治、川村竹治、瀧正雄、原夫次郎の面々が夫々閣僚に法制局長官に或は書記官長に警視總監の候補者として擬せられ、勝手な議論を吐いて喜んでゐる始末である。

『研究会からも二三人閣僚に割り込ましてやらう、渡邊千冬、前田春雨の大臣、青木子などが色氣たつぷりであるら

しい……』

なんて誠しやかな飛報も院内に傳はる、何しろ喜ぶ者と悲しむ者との交響樂は院内の隅から隅へと流れる。

△憲本提携の産物として床次總裁を目稱して

『女郎の稱號を奉つたのは政友會の惜し紛れの悪口』

からであつた、夫は前述した通り七回の起請文を書き重ねたことを諷示したのである、議場で野次を飛ばすとき

『腐れ女郎……』

と政友會の陣笠連が釣邊落しに野次る。

『あの女郎といはれるときは冷やりとする』

とは本黨の陣笠連の告白である、其の返報に本黨の野次の總大將とも言ふべき寺田市正老

『これは如何だ……』

と片手をニュット突き出して野次を返へす、議場一齊に哄笑する、この片手を示す譯は五十一議會の劈頭鳩山一郎

吉植庄一郎を始めとして中橋徳五郎氏の廿五名の同交會を統帥して、本黨から脱して議會附近の中央ホテルに新看板

を掲げたることがあつた、其時に二十萬圓の買收費が政友會から支出されて陣笠が五千圓貰つたとの噂を生ぜしめたそのことを寺田老が五本の指を以つて示しあてつけるのである。

△またもう一つの副産物として一人の失業者が出来たことである、憲本揚携劇の發表のあつた翌日

『失業者が出来ました、誰か雇手がありませんか』

と政友會の控室前の廊下を事務長たる青野老人が怒鳴り乍ら歩いてゐる。

『失業者ツて誰だい』

と反問をすると

『可愛想に砂田だよ、首になつたよ』

思はず吾人も腹の底からコミ上げて来る可笑しさに堪へられなくなつた。

『成程なア、當然のことだ』

と思つた、失業者の出来るのは豫定の筋書である。

砂田とは進行係りをしてゐた政友會の砂田重政君のこと

である、政本提携のことあつた五十一議會の半ばから進行係りをやつてゐたのが、憲本提携のために其の進行係りを憲政會の井本常作君に奪はれてしまつた。潔ぎよく渡してつた。否、砂田君は進行係りとなつたため、朝早く議會に來る必要があると言ふので、森本厚吉博士の經營してゐるお茶ノ水の文化住宅に移轉して五十圓の家賃を支拂つてゐたのである。

『失業したのでは五十圓の家賃も大變だ、失業慰勞會でもやるか』

同僚諸君が同情すること夥しい。

△また次の副産物としては、政本提携の申合のとき委員長は政本兩黨で占有することになつてゐたが、憲本提携のなるに従つて今度は兩黨で占有して政友會には理事の外は與へないことにしてつた、そして世間に名の知れてゐない憲本兩黨の陣笠が委員長席に收まり返つてゐるのは寧ろ滑稽である。

△更に面白い情景は無錢遊興者の暗中飛躍である、此の無

遊興者といふのは尾花枯られた官界の浪人共を總稱した渾名である。

何故、無錢遊興者といふかと言へば、浪人をして何も努力することなく、天下の形勢の變轉を願慮願望して、自分の位置に有利な官界の巨頭に政治の御鉢が廻つて來たときは、何を措いても其の巨頭の玄關に馳せつけ叩頭百拜して『何卒よろしく御願ひします』

と名刺を置いて來ることに依つて自分の存在を知らしむる、暗々裡に就職の強要をする、

『即ち何も努力なしに手ブラで復職にありつける』

といふ蟲のよい復職運動者のことを諷示したのである、此の官界の無錢遊興者が憲本提携の報を新聞紙上で見て

『時節到來』

と許り床次總裁の所へ參詣する者續々……

此の時節到來に就いて挿話がある、

三月上旬川村竹治氏が本黨を脱黨する意志を水野鍊太郎

氏の所に披瀝したるその翌日、

『何卒、川村氏の脱黨の意志を中止させて下さる譯には行きませうまいか』

恐る恐る水野さんの前に罷り出たのは誰あらう本省の某局長もしてゐたし、某縣の知事もしてゐた某氏であつた。

『何がために川村に意見をするのだね』

と水野さんは某氏の陳述を不可思議な顔をして反問をする

『憲本提携によつて川村さんはぢつとして居れば大臣になれるのだから……』

と眞劍になつて某氏は言ふので、

『其麼馬鹿氣たことがあるか』

と水野さんから一喝を喰つて、某氏は川村さんの脱黨を喰止めることが出来なくて悄然として戻つたといふことである、これとても某氏の腹の底には無錢遊興術が潜んで居たのである、川村氏が大臣になれば

『俺は少くとも警保局長にはなア』

との自信があつた、實際世間の一部でも其麼噂は一時あ

つた、其の無錢遊興術を水野さんの一喝によつて水泡と歸したのだから笑止千萬天下の無錢遊興者よ平生の努力が肝心だ。

△憲本提携が世間に曝露されることがもう一週間遅れたらば、震手問題もあれほど政治化しはしなかつたであらうと言ふ者がある、成程さうかも知れない、震手の委員會當時は政友會の幹部間には全然反對とは決してゐなかつた、山本梯次郎氏でも山本條太郎氏でも相當に震手を有してゐるから通過した方がよいのであらうと言ふ者もあつた、夫が憲本提携が成るや政友會は硬化したのであると言ふ者もある、代議士會で井上調査會長から政務調査會の報告があつたときに、反對の群議を敢然と向ふに廻し

『此の震手案は世界稀に見る大發明案であるから私は賛成だ、黨議は反對でも私だけは除外例を求めたい』

と言つたのは横濱の若尾幾造氏の御曹子幾太郎君であつた、若尾銀行を始めとして横濱には幾多の金融機關を有してゐる若尾家であるから震手の恩恵を蒙むることまた大な

りしと言ふべしだ。此の震災手形を斯くまで社會問題化し、また政治化し、堂々廻り七回までやつて六回といふレコードを破つて天下を騒然たらしめたその起因は新聞であらねばならぬ、新聞が輿論を喚起したので、政友會は得たり賢しでその潮流に棹をさしたのである、全く新聞の御蔭である、そして武藤山治氏が實業家の立場から

『震手は政商保護である』

と絶叫喝破したからである。

政友會としてはよい拾物をした譯である、此の拾物をさしたのは議會出入記者であつて、社會部の團體とも見るべき上下俱樂部の活動によるものである、政友會は上下俱樂部の記者達に合掌禮拜すべきである、此の尊い獲物も藏相處決案の上提の際に於ける東武氏の提案理由説明中『儼として三黨首會合のことが存在持續してゐる今日であるから片岡藏相の處決を促すのではない、不信任を標榜するのでもない……』

とやつたのですつかり事壞しとなつた。

『ヨタ幹部共、怪しからん、恰も逸出した女房に未練を残して復縁を迫り、ヒヂヂツを喰つたと同様に政友本黨に戀々として機嫌をとる様なことをやるから駄目だ、だから本黨の中村君からビールの氣の抜けた様な處決案だと嘲笑されても、吾々は喧嘩の仕様がないちやないか、偉さうに俺達を督勵をする柄かい、あの醜體は何だ』

と陣笠連は怒り散らして幹部を散々手古摺らした。

激烈なる文字を使用すると本黨が追従しないからと言ふ策戦から藏相處決案にはあの様な微温的な文字を羅列して返つて本黨に乗ぜられて敗北をとつた。

『決算の上提されたときにはもう俺達は働かんぞ』

と口惜腹を立てること無理はない、策者の策倒れとは蓋し此事であらう、政友會には智者が多過ぎる、秋田とか小泉とか岡崎とか策士の共進會の觀がある。

△新聞と政黨との關係は實にデリケートである、あれほど議會で威張り散らしてゐる政黨員は新聞に對しては恰も兒童の親に對するが如く頭が上らない、その一端の模範とし

ては出版法の擱潰しである。

八分通り下院が通過されると政府も議員連も確信してゐたものが、突如として社會部長團體の活動になり、三日もたゞざるに委員長である富田幸次郎君（帝通社長）でさへ『諸君の意のある所は諒承しました、強いて押し通さうとする意見でもない、篤と考へませう』

と屈伏したではないか、また尤も熱心なる委員である工藤鐵男氏でさへも

『惡法案の贊成者は工藤君唯だ一人』

と筆先の鎗玉に擧げられて、あれほど口達者な先生もすつかり悄氣返つてしまつたではないか。

此の筆先の原稿は社會部長中の若手連が議會で作製して同文のものを各社に廻して朝刊一齊に掲載して反對行動に出たのである。

『新聞記者には叶はん』

と竟に嘆聲を洩らしめた、記者諸君は拍手喝采をしたであらう。

議員は人氣商賣であるので新聞を利用することに於ては最も露骨であり妙を極めて居る、何か問題が惹起すると

「君、こんな事件があるよ、君だけに洩らすのだ」

と耳打をして記者を喜ばして陰で赤い舌をペロリ。

新聞記者の方でも此の心理状態をちやんと見通しのコンコンキチで

「また、利用しよるなア、よし逆宣傳をしてやれ」

と意地の悪いことを平氣でやつてぬけ議員同様陰で赤い舌をペロリと出すこともある。

適々御慈悲に議員の提灯を持つてやることもある、さうすると朱で印をつけて新聞を澤山選挙區に送附してやる酔興な人もある。

渡邊銀行破綻事件に就て

『憲政會の御用新聞たる報知新聞も掲載してゐるではないか、これでも偽否定するか』

と政友會の三土、東の兩氏が威丈高になつて豫算委員會の席上片岡藏相に喰つて掛つたまではよかつたが直ぐに

「只今の御用新聞云々の事件は取消をします」

と自發的に取消す、外のことならめつたに取り消しをしない議員さんも新聞の武器の前にはとても意久地がない。

役人連をして

「新聞社の勢力は偉いなア」

と感嘆久しくさせる。

夫から議員は何か事件が惹起すると必ず

「何々新聞にあつたが、あれは如何だ……」

と政府に緊急質問をする、新聞社側では

「好い廣告だよ」

と笑つてゐる、何のことはない新しい言葉で言へば共存共榮だ、賣れない新聞こそ至極結構。

『國民新聞は俺のことを鎗玉に擧げて許り居て、俺の身體は鎗瘡だらけだ、如何して呉れる』

とは川崎内務次官の國民新聞記者に對する愁嘆である、よく川崎次官に關係した記事をデカデカと初號活字でかく次官も洒落て見たのである、無論其度毎に取消は出てゐる

△此の議會は醫者上りの代議士が活動した、そしてまた、よく酒屋の代議士から罵倒された。

『ノミの華丸を研究して博士になつた連中に何が分る』

といふ調子でコキ下ろして了ふ。

中原、宮島の博士連苦笑してゐる。

此の博士連、花柳病法案の上提議決される三月十九日の最後の議事をどう誤つたのか一ツ手前の防火地區の建築に關する議事が終るとサツサと左様ならをされてしまつたと言つても今更如何もならない。中原博士の如きは

『おや如何したのだい、作間委員長が居乍ら妙なことをやつたもんだ』

と政府側の説明委員たる氏原博士を手招いて

『君、弱つたね』

と弱つたの百萬遍を繰り返へす、山田衛生局長

『折角待つてゐたのに何もならん、困つた』

と閉口垂れて了ふ、約束はちやんと上提議決する手筈になつてゐるのである、實際議會は水物だ、猫の目の様に變

轉する、油斷大敵、たつた六ヶ條の法律だ。

△復興局と憲政會の高木益太郎氏とは前世の宿縁とでもいふか、切つても切れない悪縁である。

前長官清野長太郎氏は高木氏に苛め殺されたといはれる位である、その高木比現長官たる堀切氏を如何に取扱ふかといふことは尤も興味ある問題であつた、又、堀切長官も高木氏と相見えて一戰交へて見たい希望を持つてゐた、即ち満を持してゐた、その機會が竟に到來した、防火地區の建築に關する委員會である。

高木氏劈頭から

『内務省で法律案を提案するときは地方局長なり、土木局長なり再三足を運んで來たのに、長官は如何なる心算か斯かる重大なる法案を提出するに一回も來ないといふ譯は如何なるものか、突如として提案し與黨であるが故に之を通せといふか、我輩は憲政會の政務調査會長であつても、また、如何に與黨の代議士なりとても、盲目法治如何なる議案でも通過させてよいといふことはない、若し夫れで悪い

と言ふならば興黨の代議士を止めてしまふ』

と頻りに新長官に喰つて掛る、

『復興局はブツ潰しやの親方だ……』

に至つては言語同断である、新長官赤くなり青くなつたりして昂奮してゐる、江木法相も復興局の並び大名の課長連も苦笑を洩らすのみである。

これでは折角楽しみにしてゐた高木氏の一戦も勝負も何もありません、高木氏の悪罵獨断場の觀がある。

『政府委員は弱い立場だから嘔鳴られても頭さへ下けて居れば喧嘩は勝ちだ、まして高木君は昂奮性に躍つてゐる人だから……』

とは内務省の政府委員衆口一致の議論。

『如何して高木君があんなことを言ふのかと思つて奇怪なことだと思つてゐたら漸く記憶から呼び出しましたよ、即ち、該案が未定稿のとき高木君から政務調査會長の名の下に笹井君まで電話があつたのを断つて行かなかつたのです夫れで怠慢だと叱られた譯です、堀切長官の述懐談である。

これこそはつまらないところで仇をとられた譯である。

『高木君が代議士である限りは閉口ですな……』

と復興局の誰か、嘆息である。

△貴族院の一言居士である高橋琢也君は講談口調で政府に内薄攻撃をして、常に議場をして笑殺せしめて居るが、豫算審査再附託の際法律の結晶見たいな馬場鉄一君と渡り合つて

『根本觀念が相違してゐる、御取消しなさい』

と喰つて掛るところなどは元氣横溢である、誰が八十三歳の老人と思ひます、白髪こそあれ、あの光澤ある赤ら顔を見ても嘘だと思ふ、山林局長を長い間勤務してゐたので山林學の泰斗であるさうな、沖繩縣知事もやつたことがある、原内閣のとき勅達になつた老人である。

△震手案も無事通過、其の代りに都下の小銀行はどしどし破綻、ほころび所ではない十萬人の預金者の死活問題である。

新正倶楽部の田崎信藏氏は

「御前達は銀行へ預金した味を知るまいが、俺には體驗がある、口惜しいか……」

と悪たれ口を叩く、その癖一文も預金を持つてゐない。

△五十二議會も平凡裡に終了、議會閉會後の政情こそ眞に見物料を支拂うてもよい、如何に變化するか、憲本内閣が出来るか、素通りするか、居直るか、早くあてた人には懸賞を出します。阿々（三月廿一日記）

虻蜂取らずの建議

提出者は鐵道同志會

鐵道や軌道の道路踏切で、列車と自動車其の他の諸車とが衝突して、人命財産を毀損することは、寒心に堪へないから、道路通行者が注意して踏切を通行するやう、道路取締令を改正して呉れ、と言ふ建議を、鐵道同志會が提出したそである。

固より交通事故を防止するのは、徳義上當然のことであるが、重い制裁を科せらるゝ鐵軌經營者は、鐵道軌道を敷設するに當つて、事故の發生を妨止する設備をするのが當然であるが、建設費の低廉ならむことを圖つて、如何に内務省が八ヶ間敷言つても、道路と平面交叉の工法を探るので、事故が頻發するのである、若し責任の輕きを希望する位なら自分から改めるのが當然で、通行者ばかりを責むべきでない、此のやうな建議を出しても事故防止に努めたいと言ふのなら、道路と鐵道と平面交叉は相成らぬと言ふことに、規則を改正するそなた、之を虻蜂取らずの建議と云ふ。